年賀状

寺田寅彦

友人鵜照（うてる）君、明けて五十二歳、職業は科学的小説家、持病は胃潰瘍（いかいよう）である。

彼は子供の時分から「新年」というものに対する恐怖に似たあるものを懐（いだ）いていた。新年になると着なれぬ硬直な羽織はかまを着せられて親類縁者を歴訪させられ、そして彼には全く意味の分らない祝詞（しゅくし）の文句をくり返し暗誦させられた事も一つの原因であるらしい。そして飲みたくない酒を嘗（な）めさせられ、食いたくない雑煮（ぞうに）や数の子を無理強（むりじ）いに食わせられる事に対する恐怖の念をだんだんに蓄積して来たものであるらしい。

それでも彼が二十六の歳に学校を卒業してどうやら

一人前になってから、始めて活版刷の年賀端書（はがき）というものを印刷させた時は、彼相応の幼稚な虚栄心に多少満足のさざなみを立てたそうである。しかし間もなくそれが常習的年中行事となると、今度はそれが大きな苦労の種となった。わがままで不精な彼にとって年賀状というものが年の瀬に横たわる一大暗礁のごとく呪わしきものに思われて来たのだそうである。

「同じ文句を印刷したものを相互に交換するのであるから、結局始めから交換しないでも同じ事である。ただ相違のある点は国民何千万人が総計延べ時間何億時間を消費し、そうして政府に何千万円の郵税を献納す

るか、しないかである。」

　こんな好い加減の目の子勘定を並べてありふれの年賀状全廃説を称えていたが、本当はそういう国家社会の問題はどうでもよいので、実際はただせっかくの書きいれ時の冬の休みをこれがために奪われるのが彼の我儘（わがまま）に何より苦痛であったのである。

　字を書くことの上手な人はこういう機会に存分に筆を揮（ふる）って、自分の筆端からほとばしり出る曲折自在な線の美に陶酔する事もあろうが、彼のごとき生来の悪筆ではそれだけの代償はないから、全然お勤めの機械的労働であると思われる上に、自分の悪筆に対する嫌

忌の情を多量に買い込まされるのである。この点はいくらか同情してもよい。

かくのごとく我儘であるくせにまた甚だしく臆病な彼は、自分で断然年賀端書を廃して悠然炬燵(こたつ)にあたりながら彼の好む愚書濫読に耽(ふけ)るだけの勇気もないので、表面だけは大人しく人並に毎年この年中行事を遂行して来た。早く手廻しをすればよいのに、元日になってから慌(あわ)てて書き始める、そうして肩を痛くし胃を悪くして溜息をしているのが、傍(はた)から見ると全く変った道楽としか思われないのであった。

ところが、不思議なことに数年前から彼鵜照君の年

賀状観が少なからず動揺を始めた。何を感じたかこの頃ではしきりに年賀状の効能と有難味を論じるようになった。今まではまるで反対の説を述べて平気でいられるところが彼の彼らしいところを表現していて妙である。

　どうも彼のいう事には順序というものがないから簡単に要領を捕捉するのが困難であるが、まあ例えばこういう事をいう。

「空間の中にｎ個の点がある。そのおのおのの点から平均ｍ本の線を引いて他のｍ個の点に結ぶ。そうすると合計ｎかけるのｍ本の線が空間に複雑なる網を織り

だす。仮にｎが一千万、ｍが百とすると十億本の線が空間に入乱れる。これらの線が一度はどこかの郵便局へ束になって集められ、そこで選り分けられて、幾筋かの鉄道線路に流れ込み、それが途中で次々に分派して国の隅々まで拡がってゆく。中には遠く大洋を越えて西洋の光の都、南洋のヤシの葉蔭に運ばれる。その数々の線の一つずつには、線の両端に居る人間の過去現在未来の喜怒哀楽、義理人情の電流が脈々と流れている。何と驚くべき空間網ではないか。」

そういえば、それはそうであるが、何故にそれがそれほど有難いかはわれわれにはよくは分らない。これ

はたぶん横浜岸壁あたりで訣別の色テープの束の美しさを見て来てから考えたものらしい。

「自分の知人Ａ、Ｂ、Ｃの三人が同じ市の同じ町に住まっている事を、年賀状をより分けてみて始めて気がつく。しかしＡ、Ｂ、Ｃ相互になんらの交渉もない赤の他人である。それが遠い所にある自分という一点を通じて空間的に互いに連結されている。そうして見るとＡから流れだす電流の一部は廻り廻ってＢやＣをも通過するかもしれない。これを推し広めて考えると、結局少なくも日本国中のおのおのの人間は全国民のおのおのと切っても切っても切り尽せないほどの糸でつ

ながり合っている訳である。」

　こういう全く分り切った事を、自分で始めて発見したように思って独りで喜ぶのが彼の癖である。またそういう事が何故に年賀状有用論の根拠になるかは、おそらく彼自身の外には分らないであろう。

　彼は時としてまたひどく感傷的な事をいう。「年賀はがきの宛名を一つ一つ書いてゆく間に、自分の過去の歴史がまるで絵巻物のように眼前に展べられる。もっとも懐かしいのは郷里の故旧の名前が呼びだす幼き日の追憶である。そういう懐かしい名前が年々に一つ減り二つ減って行くのがさびしい。」

こういって感に堪えないように締りのない眉をあげさげする。

「年賀はがきの一束は、自分というものの全生涯の一つの切断面を示すものである。人間対人間の関係というものがいかに複雑多様なものであるかを示す模型のようなものである。人情と義理と利害をＸＹＺの座標とする空間に描きだされた複雑極まりない曲面の集合の一つの切り口が見える。これをじっと眺めていると、面白くもあれば恐ろしくもある。」

何かというとすぐに「ＸＹＺの座標」を持ちだすのが彼の一つの癖である。これさえ持出せば科学者でな

い多数の人々を無条件に感心させる事が出来るとでも思っているらしい。それはとにかく、彼が近頃急に懐旧的(レトロスペクティブ)の傾向を帯びて来たのはどういう訳であろう。人は水に溺れんとする瞬間に過去の生涯全部の幻影を見るそうである。事によると彼もさきが短くなった兆(きざし)ではないかと密(ひそ)かに心配している友人もある。そのせいでもあるまいが、彼がこの頃年賀状の効能の一つとして挙げているのは、それが死んだ時の通知先名簿の代用になるという事である。実際彼の場合にはこれが非常に役立つに相違ない。彼の知人名簿には十年も前に死んだ人の宿所がそのままに残っていて、何

の符号も付いていない。また同じ人の名が色々な住所と結合してぱらぱらに散在しているので、どれが現住所であるか、当人でさえ時々間違えることがありそうである。年賀はがきを大切にしまっておくのももっともな訳である。ただし市会議員のよこしたのだけは紙くずかごに入れるようである。また自分の住所をかかないでよこすのはこの目的を達しないといってこぼしている。ずいぶん勝手なことをいうのである。

　そうかと思うとまた彼はこういう気焔を吐く事もある。「ある僕の全く知らない人の年々に受取る年賀はがきの束を僕に貸してよこせば、それを詳しく調べた

上で、その人の年恰好、顔形、歩き振り、衣服、食物の好みなどを当てて見せる」という。しかしそれくらいの事が自慢になるようであったら世の中に易者や探偵という商売は存在しない訳であり、奥歯一本の化石から前世界の人間や動物の全身も描きだすような学者はあり得ない訳である。

　色々と六（むつ）かしい、しかもたいていはエゴイスティックな理窟を並べてはいるようであるが、結局は、当り前分り切った年賀状の効能を五十の坂を越えてから始めてやっと気のつくようになったのであるらしい。

いったいこれに限らず彼の考える事、する事はたいが

い人よりちょうど一時代だけ後れているようである。幸いに永生きをして八十くらいになったら、その時にそろそろマルクス、エンゲルスの研究でも始めるだろうと皆でうわさをすることである。しかし負け惜しみの強い彼の説によると「世界は循環する。いちばんおくれたものが結局いちばん進んでいることになる」というのである。別に議論にもならないから、われわれ友人の間ではただ機嫌よく笑ってすむのである。

友人鶉照君の年賀状観の変遷史をここに御紹介して読者の御参考あるいはお笑い草に資するのである。

（昭和四年一月『東京朝日新聞』）

底本：「寺田寅彦全集　第三巻」岩波書店
　　1997（平成9）年2月5日発行
底本の親本：「寺田寅彦全集　文学篇」岩波書店
　　1985（昭和60）年発行
初出：「東京朝日新聞」
　　1929（昭和4）年1月1日、3日
※初出時の署名は「吉村冬彦」。
※「続冬彦集」に収録された。
※「複雑なる網を」は、底本では「複難なる網を」ですが、親本を参照して直しました。
入力：砂場清隆

校正：多羅尾伴内
２００３年11月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。